Masako Sakamoto-Momiyama（著）

Seasonality in Human Mortality—A Medico-Geographical Study—

Univ. of Tokyo Press., 1977, 24cm, 181頁, 3,600円.

籾山女史のすでに公刊された数多くの論文，和文の著書を読んだことのある者にとっては，この壮麗なまとめを，もう一度，英文で読み直すことはなかなか苦労のいる仕事ではなかろうか．

英文はもとより，英文を解する人のために書かれたものであるから，本書の書評も適当な外国人に，英文で書いてもらうのが，もっとも適しているのではあるまいか．以下は書評というよりは，このライフ・ワークのまとめに接した一読者の紹介ないし感想である．

内容を目次にしたがって概観する．第1章は死亡率と環境についての概説，第2章は解析の手段としての季節病カレンダーについて述べる．第3章は死亡率の季節変化について，各国との比較を行なう．第4章は季節的傾向の失われつつあるアメリカ合衆国の状況について述べ，第5章では各国における脳卒中（脳血管疾患）による死亡率季節変動の比較を行なう．第6章はセンサスⅡ法による死亡率の時系列解析，さらに第7章では日本において死亡の季節的傾向の失われつつある兆候について述べている．

籾山女史は，はじめ日本における死亡の季節変動を分析し，社会の進展と共に冬季集中化が形成される事実を見出した．その後，諸外国との比較によって冬季集中が極相ではなく，さらに北欧や北米大陸で見られるように，季節変化のはっきり現われぬ“緩慢型”にかわることを見出した．その理由としては冬期の暖房の普及ということに注目しているのである．

一読しての感想は，何と言っても女性らしい，まとめに対しての徹底さである．オリジナルな所見を，既刊の論文，著書で知っている者にとって，再説された本書からはオリジナリティというよりは，一つの問題にとりついたら徹底的に攻めたてるという執拗さを，本書からまず感じてしまうのである．これは評者のように学問的雰囲気から離れている者が特に感ずる点である．問題は専門的なことながら，これは人間の生存と環境に関する問題なので，以下いささか文明論的な感想を述べる．

冬季集中が緩慢型に移行したことはcultural evolution の optimal form なのかどうか？　著者のために序文を書いたテキサス大学のサージャント（F. Sargent, Ⅱ）は，これに対し“She is probably correct”と言っているが，私はこの言葉を“correct”よりは，“probably”にウェイトをかけて考えてみたい．

たとえば，ハウス栽培によってキウリ，ナス，ピーマンが年中食べられるようになっていることと，緩慢型への移行は，文明の進展のパターンとして，どこか共通点を持ってはいないだろうか．文明論的に考えたとき，はたしてそれは目ざす進化の極相と考えてもよいのだろうか．

ハウス栽培を可能にしたものは何か，そこにつぎ込まれているのは莫大な肥料や農薬であり，これらはまさしく“親の遺産”に相当する石油に依存している．日本に石油が入って来なくなったらハウス栽培は成り立たない．生産には携わらず，都会でもっぱら消費ばかりしている者は，季節を問わずうまい物が食えれば，それが文明の極相に近い状態と勘違いしてしまうが，食料生産の現場までたどって考えてみると，工業化した，親の遺産を食いつぶす農業が，はたして高度文明の極相と考えてよいかどうか，たいへん疑問に思われてくるのである．

緩慢型への移行は暖房の普及に依存するというが，その暖房は現在，尨大な化石燃料の消費に依存しているのであり，これまた“親の遺産”の世話になっているのである．

死亡率の緩慢型への移行という点だけを見ていると，年中キウリが食べられるように，現象的には文明の進歩がそこにあるように思われるが，もっと広い視野から見ると，たとえば，人間は環境を制御することにより，多様な環境への適応性を失いつつあるように思われるのである．つまり，緩慢型への移行によって何が犠牲にされているかが問われねばならぬのであり，そうすると死亡率の緩慢型への移行というようなことだけで文明の進歩の評価はできなくなってしまうのである．

専門の分野において徹底した態度を示された籾山女史が，文明の進展の問題に対し，条件付きの発言で終わるはずはあり得ない．専門をふまえ，さらにこれを越えた広い視野からの発言が望まれるのである．（根本順吉）